



「李香蘭」を大連に観て



中嶋 嶺雄

(東京外語大学教授)

五月初旬の大連は、まだアカシアの花には早く、日本統治時代の建物が昔ながらに並ぶ中山広場の藤やライラックが、ちょうど満開だった。

天候もやや不順で、宿舎のリージェント・ホテルが建つ老虎灘の丘には終日強い風が吹き、眼下の海辺も大連特有のセルリアン・ブルーの空を映し出すことがないままに、灰色にくすんでいた。

だが、ここ大連の地には、日中間の「文化」の交流がまもなく始まろうとしていて、それとはなしにある種の緊張感が漂っていたように、私には思われた。

「文化」の交流が国際間の相互理解を深めるというのは、交流の第一段階であって、本当に「文化」

がぶつかり合うときには、火花が散ることもあろうし、血の出ることもある。

ましてや日本の中国侵略という歴史の原罪を背負って、昭和史の重要な一断面をミュージカルに構成し、「二つの祖国」に引き裂かれた二人の女性、李香蘭と川島芳子を、それぞれ野村玲子扮する主人公と保坂知寿扮する語りとして登場させ、「五族共和」の満州国建国から日本の敗戦までを、その舞台であった中国東北の現地で再現すること自体、大きな冒険であり、賭けであったような気がする。

去る五月五日、大連の中山広場に面した人民文化倶楽部での初日の公演は、この地が旧満鉄の本拠

地でもあっただけに、このうえない臨場感のなかにあったのだが、会場を埋めた観客の拍手と、実際に涙を流していた中国の人たちの表情を見て、劇団四季の「李香蘭」中国公演が、成功したことを確認することができた。

本年は、日中国交二十周年なので、様々な交流計画が進んでいる。けれど、本当の国際交流は、国家レヴェルのそれではなく、民間レヴェルの「民際交流」であることを示したといえよう。

ミュージカル「李香蘭」は、すでにわが国でも二十万人に達するロングランを続けており、私も青山劇場、日生劇場に続いて、今回が三度目であった。

ミュージカル「李香蘭」は、すでにわが国でも二十万人に達するロングランを続けており、私も青山劇場、日生劇場に続いて、今回が三度目であった。

ともまごぶで

な私たちが、高度成長時代をどうやら切り抜けてこれたのは、余裕のない生活に慣れていたせいではないだろうか、と思うことがある。どうもそうらしいのである。

美味しいものを前にすればがつがつ、腹が破れるまで食う。酒を飲むと、がぶがぶ早のみする。ゆっくくり味わうということがない。そして必ずこう思う。こんな美味しめをして、明日どんな不幸が待っているかも知れない、と。

いつの時代でも、ほっといてもダントツに出来る子がいる。がんばりと学ぶ子がいる。しかし、こんなのは稀なのだ。教育の直接の対象にはならないのである(そんな子は、教える側にとっては、厄介で、嫌味の極といってもいいのである)。

現在、子供たちがゆつたりしてみえるのは、大多数の、とりわけもっとも厚い層の子が勉強に、受験に直接参加しているからなのである。勉強や受験が少しも特殊

でない社会になったからなのである。私は、小学生が鉢巻きをして、二十四時間特訓と称して、塾のしごきに耐えているさまを見ながら、そこに少しも悲壮感を感じなかった。深夜マーケットで、眠い目をこすりながらレジを打つ学生に、特別のものを感しなかった。たしかにほめられたものではないが、だからといって子供の心身をすり減らす程度のものでないものである。

貧しさが減った。とりわけ、「心」の貧しさが減った。つまらない嫉妬心がなくなった。他人と自分の不幸とをひき比べて生きてゆかなくてもよくなったのである。子供たちにこの気配が特に濃厚だ。

私は、何もかもよくなったなどといいたいのではない。否定面を数え上げるのは簡単である。しかし、いまの子たちの本質的に優れている点を指摘し、それを励ます

ほどに伸ばす配慮はうんと少ないように思われる。残念ながら、私たちは、つい最近まで、頭ごなしの努力の二文字に従うことが、社会をも自分をも幸福にする唯一の手段であるような時代に生きてきたのである。この時代を生きたものには、「残念」ではなく、「貴重」といいたいのはやまやまでである。しかし、勉強も、仕事も、遊びも、等価に見ることが出来る時代のほうが十分に快適なのである。

私は、いまの子たちが、勉強も遊びの一種になるような時代の門口にいるのではという実感をひしひしと感じる。もちろん、そういう時代には、それに特有の困難はあるに違いない。その困難を予想することだつてできないわけではない。しかし、大切なのは、困難があるから待てというのではない、過去のつまらぬ困難をひとまず越えていったことを喜ばなければならぬのではないだろうか。

一日も休まず

すでに、一部の批評にあったように、このミュージカルには、激動の昭和史の勉強会といった側面がないわけではない。

また、「夜来香」や「支那の夜」、「蘇州夜曲」が出てくることもあって、ある種レトロ・ブームをかきたてる、という側面もないわけではない。

だが、日中関係によく見られる薄っぺらな贖罪感や、それと裏腹のノスタルジーではなく、日中関係史の原点に息づいた人々の夢や友情、そして挫折感や猶疑心を、政治やイデオロギーのプリズムによらずに、同時代史の総体として、その光と陰の両面をリアルに照射したところに、意味があった、といえよう。

そこには、やや平板なドラマの筋書きをよそに、圧倒的な迫力で昭和史が露出しており、その切なさや傷まじさが多くの人々の、そして中国の観客の共感を呼んだの

だ、と私は思う。

もとより、このような雰囲気の後後に、今日の中国の「政治の影」がなかったわけではない。今回の大連公演が終わったあと、感想を述べた大連市の当局者は、このミュージカルを称賛しながらも、語りとして終始登場し、また、私の見方では、それゆえに、このミュージカルが成功したと思われる川島芳子について、

「彼女は男装をした軍人であり、中国人民に対して罪を犯した人物です。中国人民の考えでは、彼女はよくない人物です」と語ることを決して忘れはしなかった。

この点は、中国に最近生まれつつある新しい芸術感覚において、川島芳子と、それをめぐる日本軍の葛藤や苦悩を見事に描いた何平監督の映画「男装の麗人・川島芳子」(西安映画製作所作品、脚本・竹子、主演・張曉敏)が、中国当局によって国内での上演を禁じられているという「政治の影」とも連動しているといえよう。そして、このような「政治の影」にもかかわらず、「李香蘭は、ついに中国へ還った」のであった。

開演まで時間があつた私は、大連文化倶楽部と道一つを隔てた中国銀行大連分行の建物(旧機兵正金銀行大連支店)を正面に見て、広場のベンチで妻と一緒にスケッチをしていた。

すると七十歳近い一人の老人が近寄ってきて流暢な日本語で話しかけ、私たちとの偶然の出会いを惜しんでなかなか立ち去ろうとしなかった。

今夜、目の前の人民文化倶楽部で「李香蘭」の公演があるから、是非観てほしいと勧めたのだが、彼がああ観客のなかにいたのかどうか、私は知らない。

読者と編集者のページ

長期政権のツケ

七月号外国人ジャーナリスト座談会「PKO審議『そんなに急いでどこへ行く』を読んだ。そのなかの「自民党が悪いことをしても自民党に投票する。わけのわからない国民」との言葉にガツクリしてしまった。

なるほど長期政権のしがらみから、癒着、利権、特権、腐敗など見え見えで、一度スッキリ洗い直せと思いついても、いまだ政権交代は実現しない。国民はベストはあきらめたが、他党よりベターと思っているのか。いまや日本人はウサギ小屋、過労死など忘れ、中流階級、少くとも物的には世界の高标准と自認、満足しているかのごとくである。しかし政治家を含めて国民の政治、国際感覚、内面的な

豊かさは自慢できる状態であろうか。選挙の時は未来とか正義等より、まず我が家にとつてどこが有利で安全かだけが優先する。

こんな調子だと、PKOも将来堂々と一人立ちし、また蘆溝橋やハワイでの悪行を繰り返しかねない悪しき時代への歩みも心配である。

(東京・渡辺茂夫・75歳・自由業)

島原にこそ援助を

発展途上国への開発資金援助など日本のODAは今年も世界第一位となった。富める国日本が資金援助をするのはそれなりの理由があり悪いことではない。当然の義務でもある。だが、日本の外に対する貢献と同様に、国内問題にも十分目を向け

てほしいと思う。

雲仙・普賢岳の大火津流が発生して以来、一年以上にわたってふもとの島原市と深江町では今なお約千六百世帯六千七百人が仮設住宅などで厳しい避難生活を送っている。普賢岳の火山活動は依然活発、ドームの隆起も続いているという。

雲仙被災者に対する援助はこれまでもずっと続いてきたが、国のこの問題へのとりくみ方は真に被災民を救済しようという意欲に欠けていたように思われる。

国は火山活動が終息してからというけれども、普賢岳の火山活動は数年間は続くと考えられているのだから、一日も早く不自由な避難生活を解消する方策を講じるべきだろう。移住を提意した被災者には安住の地を提供し、父祖の地に戻る希望をもっている人にも、現代人が住むに値する水準の仮住居を用意す

笑ドクヤク

